

## 石田忠彦氏の《紹介》『依田学海 墨水別墅雑録』 を読む

今井，源衛  
梅光女学院大学教授

<https://doi.org/10.15017/11947>

---

出版情報：語文研究. 65, pp.48-51, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



石田忠彦氏の

『紹介』『依田学海 墨水別墅雑録』を読む。

今 井 源 衛

本誌第六十四号の石田氏の文を読ませてもらった。お忙しい中を、と恐縮だったことのほかに、これまで何となく不審に堪えなかつた事が、これで少しは分かつたという気がするのは、私にとつて真にありがたいことであつた。

関良一氏の「依田学海の日記―近代文学史資料として」(国文学、昭和三十九年八月)によれば、無窮会所蔵の依田学海の日記の存在が一般に知られるようになったのは、昭和二十七年五月刊の岩波版露伴全集月報二〇号の「学海日録抄」、また同年十一月刊鷗外全集の月報一八の森銚三氏の「鷗外と学海」あたりかららしく、次いで昭和女子大学の「近代文学研究双書」第一〇巻(昭和三十三年十月刊)によってさらに広く知られるに至つたのである。

その後も越智治雄氏の「新文学胎動期の依田学海」(文学、昭和四〇年一〇月)や、小田切進氏の「学海日録と小波日記―埋もれた日記」(群像、昭和五八年八月)が出てゐるし、学海の日記のことは、昭和五九年刊の日本近代文学大事典にも記述がみえていて、今さら珍しい話題ではない。

しかし私にとって不思議でならなかつたのは、上記の論文の筆者

の方たちが、例外なく学海の日記の学問的資料価値の絶大である事を強調されながら、しかも、その後この日記の出版の企画が、少なくとも近代文学研究者自体の中からうまれたとは、寡聞にして聞かないことである。

例えば、関氏の上記の文の末尾には「篤学の士によってこの浩瀚な日記が解読、翻印される日の早からんことを期待してやまない」と記され、小田切氏の文の末尾にも「明治文壇史のきわめて興味深い記録であるだけでなく、日本近代史の研究にも価値あるものと思われるので、「学海日録」の一日も早い公刊が待たれる」とある。

関・小田切の両氏が斯界の泰斗であることはいうまでもなく、学海の日記はこうして日本近代文学の最も重要な資料の一つとして、学界の公認を得ていることは勿論であり、その刊行も切望されているとみてよからう。にも拘わらず、近年では殊に数も多いはずの近代文学研究者が、だれひとりとしてその公刊に乗り出されないのは、一体何のためなのか。

失礼な憶測だが、平常写本などを取り扱うことが少なく、読みづらい日記などつい敬遠する気になるだろうし、いくら良い資料だ

といつても、あの四四冊という膨大な量では、それもしかたがないか。……口には出しにくいことだったが、そう私は思っていた。当面自分でやっていけないことを、専門外の者が余計な憎まれ口をたたくのもどんなものか。しかしそれにしても、やはり遺憾千万なことには違ひなかった。

今回、石田氏の文を見て、私のこういう受け取りかたは、かなりピントはずれであることが分かったような気がするのである。石田氏は、その論の結びにこう言う。

それ（墨水別墅雜録の発見）から刊行まで実に四年間が経過している。みよによつては、たかが妾宅の日記である。失礼ながら必ずしもお若くない先生が、それに四年間をかけられたということが、一体どういう意味を持つのか考えさせられるのである。

そして、その意味とは「この日記に出てくるその交友関係によって新たに明治文学史が大きく書き変えられることはあるまい」し、また「本書の刊行によって今まで分からなかったことが一つ、分かったということは事実である。それでいいではないか、という実感」が湧くさうである。

要するに石田氏が言いたいことは、「余命いくばくもない老人が、四年もかけて、封建時代の遺物のような二流作家の、しかもくだらぬ妾宅日記の刊行に大汗をかいたとは、ご苦労千万なことでした。まあまあすこしは新しい記事もないわけでもないから、まんざら無駄とも言えまいか」ということだろう。

私が老人であることは、勿論自分でも知っているつもりであり、数年にわたって専門外の作品に手を取られた辛さも身にしてみたい

る。またそれだけに、この仕事に着手する際には、あれこれと考えたあげく、その覚悟を定めたのであった。

それに踏み切らせたものは、私にとっては第一に作品としての面白さであった。石田氏は隅田河畔の風景描写や漢詩など、その羅列は退屈だといわれるが、私には面白くてたまらない。週間読書人の書評欄に、富士川英郎氏が本書の興味をひく点として、多くの知名人との交際やその逸事、また当時の社会的重大事件のほか、それ以上に学海の江戸文人の風貌と「そのような文人の風雅に対応する豊かな自然の環境が多分に見いだされたこと」を挙げておられるのは、全く同感であり、小出昌洋氏も月曜評論（昭和六三・二一・一五）に、本書の明治二九年七月二十五日条が無窮会本の当日の記事と相まって、名高い百物語の詳細を語るものであることを指摘された。また最近木村三四吾氏が『吾仏の記』の七一ページ以下に、本書の記事によつてはじめて馬琴の遺著の伝来の経緯を詳細に知りうる点のあることを述べておられる。この種の記事で新しい知見を我々に提供するものが多いことは、長谷川泉氏が図書新聞（一九八七・八・一）の本書の書評で、「要するに文壇人や劇団人、政・官界の名士の逸話や私生活の裏面史が満載されている」と言われる通りである。この見事な人間喜劇が面白くなって、一体何が面白いのか、私は敢えて石田氏に問いたい。

石田氏が「たかが妾宅の日記」と言われる点についても、私はどうして「たかが」をつけなければならぬのか、理解できないのである。それは鷗外の「雁」もどうせくだらぬ作品なのか。まさかそうではあるまい。

あの当時妾を持つことはほとんどステイタス・シンボルに近かつ

た。学海の周囲にいる川田夔江・関根痴堂・杉浦梅潭みな然りであり、それが本来矛盾に満ちた人間関係であればこそ、彼らはいずれもいろいろな苦勞をかさねている。そこがまた面白いのである。

学海とその妾瑞香もまたそれである。才知のある美女が老文士に囲われ、子を産んで、どのような心境に生きてゆくものか。その猛烈なヒステリーの発作ぶり、彼女を相手に果てしなく愛憎の格闘をつづける学海の姿に、私はしばしば胸打たれる思いがした。

石田氏は文中に、学海が勸善懲惡主義であり、またその近代性を示唆される。維新のころすでに四十歳に達していた旧佐倉藩士がもしそうでなければ、不思議というものだ。旧藩主に以後も長く忠勤を励んでいるのも、旧藩の要職にあった一族であるかぎり、そもそも本の《紹介》とは何か。石田氏の論の過半は学海評であり、それも本書に即したものは少なく、従来から知られている資料に拠るのである。そして、肝腎の本書の記述については、私の「解題」や文学に掲載した論文「に詳しいので、省略する」と言う。察するに、氏の意図は氏自身の学海論の展開に中心があつて、具体的に本書の内容《紹介》しようとするものではないらしい。私は本の紹介とは、あくまでも該本の内容に即するべきものであつて、それ以外は付けたりに留めるべきものと思う。それではなければ意味がない。

しかも、氏の学海評もまた彼の「近代文学」との拘わりかたにのみ軸が置かれて、前向きか後ろ向きかが、ただ一つの問題らしい。近年には以前のように透谷・藤村を近代文学の唯一の開祖とする考えかたにもかなりの反省あるいは修正が加わつて、江戸末期にひき

つづく漢学系統の人々のなかにも、別種のそれを認めようとする動きもあるらしい。それもおそらくは、中村真一郎・富士川英郎・石川淳ら西欧文学畑出身の人々の活躍に刺激されたことかと思うけれど、石田氏も学海をこの線から近代路線に組み入れられるかどうかと、ひと思案の態である。

しかし、私に言わせれば、こんな事どうだっていいだろう。青年のころ進歩的だった人が、中年以降保守的になるということは最もありふれた事実であり、別段恥ずかしいことでもない。一人一世代、一度身に付いた価値観が、生涯の中にそっくりくると変えられる訳のものではあるまい。

学海にせよ、初老に及んでからの、あの過激な演劇改良運動や、常に西洋文学者との交渉を保つていたこと、五十三歳のときに作つた「白鷗社約四則」の中に、席に糸竹と脂粉とを交えず、席次を定めず自由に着席せよと言うなどのことを見れば、全くの旧弊な人間とも言えず、さりとてまた晩年の十余年、世に容れられず、自ら門を閉ざして詩作三昧の生活を送つたことからすれば、彼に近代文学史の出発点のどの位置に据えることも、何やら気の重いことに、私には感じられる。

このような発言が文学史家としては失格であることも、私は承知しているつもりである。それを敢えて私に言わせるものは、性急な文学史的位置付けや評価の前に、もっと大事なことがあるのではないかと、作家そのものに取り付くということではないのか。

殊に今の場合には、問われているのは五冊の新資料である。しかもこれと深い関係のある膨大な四冊の日記にもほとんど手が付い

ていない状態でありながら、それらをすっ飛ばしたまま、一体どのような確かな事が学海について言えるというのか、私には理解しがたいのである。

冒頭に述べた私の不審も、坪内逍遙の研究者として知られる石田氏ですらも、その直接の先輩である学海の著作について、この程度の関心しか持たれないのならば、他は推して知るべしというところに落ち着かざるを得ないのである。関氏や小田切氏の発言は当分の間そのまま放置されるのであろうか。

終りに、最近小出昌洋氏から贈られた富山新聞、昭和三八年四月十五日号の学芸欄に載った森銃三氏の「埋もれている文芸史資料―依田学海日記を読む」の末尾一節を引き添えておく。私の言いたいことも、これに尽きているし、石田氏にとっても示唆に富むはずと思うからだ。

学海翁のことを考えるのには、やはりその人物よりして考えてかかるべきであり、翁の人物を知るのには、その日記以上の資料はないのであるが、かような好資料がまだ文学史、演劇史に関心を有する人々にも利用せられずに、死蔵に近い形で保存せられていることを遺憾としなくてはならない。翁にかんする文献としては、坪内逍遙の「柿の蒂」の中の記載が第一にあげられるが、逍遙にしても、この日記を参考にしたら、翁にかんする叙述は、もう少し変わったものとなったであろうにと思われるのである。